地域の宝　みんなで四人になっても

金澤妙子

今年は若者を伴って

平成十八年九月、一枚の地元特産品のパンフレットに掲載された二人の土地っ子（ひなたちゃん・ようすけくん）の表情に惹かれて、私は、和歌山県古座川町の町立R保育所を訪れた。その時の出来事を、本誌第一〇七巻第二号（二〇〇八年二月発行）に紹介したが今年はその保育所に、ゼミ生五人を連れて出かけた。

話術も巧み、保育技術に秀でたベテラン保育者が、子どもの心をとらえて離さないことはいうまでもないが、保育技術はつたなく、子ども理解もまだまだだが元気いっぱい、とにかく子どもが大好きだというお兄さん、お姉さん、先生にも、なぜか子どもは強く惹かれるということを、保育に携わる者なら誰でも知っているし、保育実習などで特に実感するところだろう。子どもは、自分に少しでも近い存在を感覚的にかぎ分けるのかもしれない。保育は人間と人間の出会い・ふれあいの場だとつくづく思う。そういう若者のいないこの町に、子どもたちにとってシンパシィ（共感）を感じられる若い学生を連れてきたいと思ったのは、前

回の訪問の帰路であった。

新年度になり、五人の新三年生が私のゼミに入ってきた。果たして、ゼミ合宿でとても遠い和歌山へ行くことに賛同してくれるだろうか。そして、さらに奥地の保育所への誘いにはどうであろうか。新年度早々に話してみた。まず、和歌山行きはクリア、次に、私が惹かれた子どもたちのパンフレットを見せ、この子たちに「会いに行かない？」と誘ってみた。パンフレットを見せると「かわいいー」の声。しかし、お金もかかることなので、「この奥にはもう保育所はない、それくらい奥地よ」とか、「道はとても細いけれど運転は大丈夫かな」などなど。町の方が聞けばおしかりを受けそうなことまで、いろいろ言ってみたが、「実家もそんな感じ」とか。こうして、私たちは五泊六日の和歌山でのゼミ合宿の中日一日、その保育所を訪れることになった。

参観に向けての子どもの確保

大勢いる園なら、一人、二人の休みはどうということはないが、R保育所はとても少人数なので、日程をお盆明けにしたこともあり、子どもの確保のために、私はひなたちゃんのお母さんに以下のようにメールを送った。

「本日、新しい所長先生とお話し、八月二十一日に学生を連れて保育所にお伺いすることになりました。お盆休みの余波が心配ではあるのですが、皆さん帰ってきてくださるといいのですが……。○○家はいかがですか？　長期 大阪滞在だったりして？　心配しています。なんとかなりませんかー！」

するとすぐに返事があり、「八月二十一日はこちらに帰ってきていますよ。ようすけくんは、お母さんが里帰り出産しているころなので、いないかもしれませ

ん。何人ぐらいで来られるのでしょう。Mさん（前回お世話になったこの地方の新聞社の嘱託記者）にもちらっと話したら、『一緒に泳ごう！』とのことでした。楽しみにお待ちしております」と返事が来てひとまず安堵した。

伝わってきたワクワク、ソワソワ感

私たちの「園住み込み合宿」（学生はレポートでそう表現していた）先であり、この保育所のある集落近くにお母さんの実家があるという保育者Hさんが、土地勘のない人の運転では道が不案内だと、昨年同様、同行を申し出てくれ、八人乗りのバンに乗せてもらった。子どもたちの登園が九時半ごろとゆっくりしていることがわかっていたので、それに合わせて到着できるように出発した。保育所が見えてきて、私が「あれが……」と学生に案内しようとしたとき、保育所の窓に小さな子どもの頭が見え、引っ込んだ。今か今かと待っていたかのように感じた。私たちが車を降りている間も、子どもが玄関ホールに出て来たり、声はよく聞き取れないものの、何か言いながら引っ込んでいったりのパタパタ加減に、待ちに待った（？）知らないお兄さんお姉さんとの出会いに、ちょっと舞い上がった感じが伝わってきた。

後で知ったことだが、三歳児のももちゃんは、本当は朝、「お休みする」と言ったのだそうだが、親御さんに「お兄さんやお姉さんが来るよ」と言われて登園したとのこと。ゼミ生の存在は、少しは吸引力になっていたようで、到着時に感じとった雰囲気はあながち間違いではなさそうだった。

三人の子どもと九人の大人

前回の訪問当時、在園児六人のうち、二人が卒園することもあり、保育所の存続が危ぶまれていた。現在は四歳児になったひなたちゃんとようすけくん、三歳

児になったももちゃん、新入所の二歳児一人を加えて、以上四名がこの保育所の子どもたちだ。案の定、ようすけくんが休みで、この日の子どもは三人だった。大人は、百人を超える大規模園から来た新しい所長さん(男性保育者)、昨年もいた女性保育者の二人。合わせて六人、これがこの保育所の平素のメンバーである。

訪問者は七人。子どもたちはぐるりと九人の大人に囲まれた。そこへ、新聞記者Mさんが取材も兼ねてか、里帰り中の娘さんと〇歳児の初孫子を連れてやってきて仲間入りし、子どもは四人になったが、大人は十一人になった。

絵本読み聞かせ体験

子どもたちは私たちの視線をいっぱいに感じながら朝の会をする。ここで絵本を読むのだが、保育者二人はどちらが読むかと譲り合った末、まず、所長さんが一冊読んだ。その後、参観人数の多さに耐えかねたか、学生への配慮であったか、次は学生に絵本を読んでほしいと振ってこられた。

本学では、教育実習は四年生で行う。三年生のゼミ生は全員入学以来、まったくと言っていいほど乳幼児に触れたことはない。ゼミで六月に一日、保育園観察に出かけたことだけが唯一の体験だった。学生も自信がないだけに慌て、見ていて私も慌てた。学生五人も互いに譲り合い(?)結局黒一点のゼミ長が読むことになった(下写真)。黒一点と書いたが、この学生は、私から見ると今どきの線の細い男子学生で、頼りなげで、私はとても心配した。案の定、絵

本の持ち方も、めくり方も、読み方も、全部ひっくるめて「下手くそ」だった(このときの様子はその後もよく話題になり、本人も十分納得している。とてもあがっていたそうだ)。それでも子どもたちは食い入るように見つめていて、小さな頭の中でどんなお話の世界が広がっているのだろうと思わされた。

後日、土地の特産品購入のためやりとりした際の、ひなたちゃんのお母さんからのメールの末尾には「ｐｓ.ひなたはあの日、かっこいいお兄ちゃんが来たと大はしゃぎでした」とあった。夏休み中のゼミ生連絡網で回して、一同感謝した。

所長さんの心意気と戸惑いにふれて

絵本を見た後、プールに入る体操を兼ねてか子どもたちが歌に合わせて踊って見せてくれた。ビニールプールでは、五人の学生がぐるりと囲むような形になったが、子どもたちはすぐにうちとけていた。やっぱり、子どもは自分に近い存在の若い人に魅力を感じるんだなあと思った（下写真）。

子どもたちと学生がプールで遊んでいる間所長さんと話す機会があった。この保育室の左右の壁面は、一方が床から天井までの板壁、もう一方は床から腰板があり、その上にサッシの窓がある。昨年は壁側に子どもの定位置として椅子が並び、その上に歌の歌詞をはじめさまざまなものが貼ってあった。サッシの窓の下には幅一間ほどの本棚があり、たった六人しかいないが、たくさんの絵本が並んでいた。その量と傷み具合や後ろに記された名前から、各家庭で不要になってもらい受けたものも入っているようだった。

今回行ってみると、それが逆になっていた。窓下にあった本棚は壁際に移動し、中の本はずいぶんセレクトされ、とりあえず不要なものはしまわれていた。代わりに子どもたちの定位置としての小さな椅子が窓の下の壁に四つちょこんと並んでいた。所長さんによると「窓側に座ったほうが、貼ってある歌詞や当番表などが子どもに見える、歌詞を背に歌うのはおかしい」という。聞けば至極もっともな理由だったが、昨年、私は自分では気付かなかっただけに、なるほどと思った。名称に「〇〇保育所」とあっても、入所児四名で〝支援の場〟という感じの方がぴったりきそうである。だが、保護者が働いている間、ただ来ていればいいとか、預かっていればいいという気持ちになってしまうのではなく、園児四人でも、一つの保育室を子どもの目線で点検しながら環境を構成し直す。規模にかかわらない基本があった。これまで経験した職場と環境は大きく違っても、与えられた職場に背筋を正して向かっている所長さんの感じに好感をもった。

また、こういうとても小さな保育所に来て困ることはどんなことかと尋ねた。尋ねながら私の頭には、年齢幅があることや、同年齢でのルールのある遊びができないなどのことが想定されていたと思う。そんな私に「そうですねー。今の時期でいえば、これまでは運動会で気持ちを一つにするためにタイケイヘンカをやったが、そういうことができなので、何をやればいいか悩む」と所長さん。私は「タイケイヘンカ？　それはどういうのですか？」と聞いた。説明によると、直線から円形になったり、また違う形になったりするものだということだった。大規模一斉保育型の園と付き合いのない私には、聞き慣れないものであったわけだと思い、それは確かにそうですねと納得した。二歳児から四歳児の四人の子どもと生活しながら「隊形変化」という言葉が出るところに、所長さんの戸惑いと移行期を見た気がした。来年こそは運動会を見たい。

垣間見た極小園の課題―大人のまなざしからの逃げ場の必要性

Hさんが名物〝めはりずし〟を握って昼食に持参したのを、子どもたちと一緒に食べさせていただいた。食事の場は、単に空腹を満たし、栄養を取るというだけでなく、さまざまなことが起こる魅力的な場であると、常日ごろから私は思っている。このときは、子どもが少し強く注意される場面に出くわした。大勢の子どものいる園では、場合によっては紛れて逃れられることも、極小集団ではそういうわけにはいかない。保育者に見えすぎること、漏れていく場のないところでは、いかに見て見ぬふりをするのかが難しい課題かもしれないと、川泳ぎへの道すがらHさんと話した。

五人の若者＝盆と正月

私たちの訪問に合わせて休みを取ってくださったというひなたちゃんのお母さんが、昼食後、子どもたちが昼寝をしている間、近くの川泳ぎに案内してくれるべく、スイムウエアに水中メガネを手に誘いにきてくれた。

昨年、帰路、土産物屋で出くわした土地の方に「古座川は、和歌山の四万十川ですね」と言うと、「カヌーで流れるには四万十川だけど、川のきれいさは四万十川以上やね」と言われた。浅瀬は底が見えるほど澄み、深みはエメラルドグリーンで、いつでもどこでも泳げる川だ。この川での泳ぎも学生を誘った餌の一つで、遊泳可能な水温の時期をひなたちゃんのお母さんに聞いて、日程を決めたのだった。

はしゃぐ学生の脇でひなたちゃんのお母さんとHさんと私、それから、Mさん（昨年同様、このあたりにお昼を取る店のないことを心配して、訪問に合わせ、あらかじめ用意してくださったらしい巻きずしとシューアイスを持って来てくれた）も加わって、川原

の石に腰を下ろしてごちそうをつまみながら子育て談義をしていた。

地アユを取るために川に潜りに来たスイムウエアのおじさんが、学生のにぎやかさに、「おや、こんなときに珍しいなー、若い人がおる。盆と正月が一緒に来たようだなー」と言ったので、顔見知りのMさん、ひなたちゃんのお母さんは、そのいきさつを説明していた。おじさんの言葉は、盆と正月には、この町を出て行った若者も里帰りし、町に活気が戻ることを語っていた。それはとりもなおさず、普段町に若者がいないことを示している。

お盆に帰省した地元の若者が、都会の暮らしへと戻っていったころ訪れたゼミ生五人のことを「東京のにおいのするべっぴんさん」(Mさん弁)とよんでいたのは、その若さゆえに、盆と正月の象徴だったようだ。多少の土地勘のあるHさんによれば、やはり平日の昼間、若者はいないだろうということだった。

繰り返すバイバーイの響き

川遊びから帰ると、子どもたちは昼寝から起きていて、また、学生の手を引っ張って自分の絵を教えてくれたり、一緒におやつを食べたりした。ちょうど来所した地域の絵本の読み聞かせのグループの方々の読むお話を、子どもたちと一緒に聞き、私たちはおいとました。玄関に送って出てくれた子どもたちは、私たちの車が出発した後も、パタパタと車の見える窓際へ走り、ずっと「バイバーイ」の声が聞こえていた。私自身の幼い日、いとこが私の郷里で楽しく夏のひと時を過ごして東京に帰るとき、「楽しかったね、また会おうね」という思いで、こうして何度も何度も手を振りながら、車を見送った。そのときの、胸いっぱいに広がった子どもながらの寂りょう感とでもいうような感情を、私は車の中で思い出し、少しずつ遠のく声の主の気持ちに重ねてみた。

(大東文化大学)